一般演題：

P-17-15

地域包括ケアにおける多職種連携へ 医療・介護と薬剤師を結ぶ「実験 お薬教室」の有用性

〇笠原友子 [1)]、吉野 貴大 [1)]、日光智愛 [1)]、羽咋支部薬剤師会、
能登北部薬剤師会、七尾支部薬剤師会、かほく支部薬剤師会、石川県薬剤師会

[1)] 羽咋支部薬剤師会

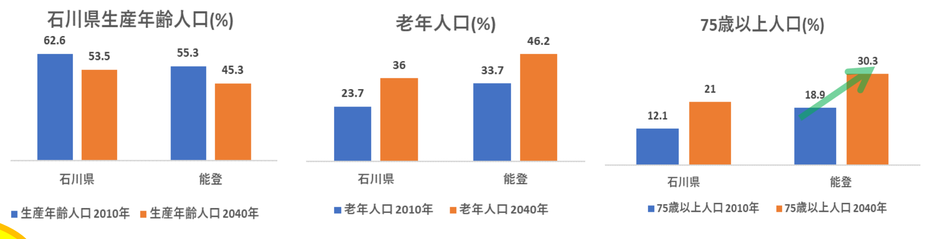
団塊の世代が 75 歳以上となる 2025 年に向けて、2018 年4月に医療報酬と介護報酬の同時改定があった。改定では、地域包括ケアシステムの構築と、医療機能の分化・強化、連携や、医療と介護の役割分担と連携の推進が重点項目となっている。

この中で、薬剤師の役割として在宅での適正な服薬を推進するため、医薬品に関する適正使用のための体験授業として「お薬教室」を実施し、医療・介護に関わる事業者と薬剤師との顔の見える関係作りの構築を図った。その有用性を検証した。

2017.1017北陸中日新聞朝刊掲載

背景

能登半島は、今後さらに生産年齢の減少と老齢人口の増加が見込まれる。



資料出典:石川県の将来推計人口(平成25年3月国立社会保障・人口問題研究所推計)
／石川県県民文化局県民交流課統計情報室

参加者属性

職種：歯科医・看護師・ケアマネジャー・保健師・社会福祉士
介護士(ヘルパー）・理学療法士
市民福祉部長・地域包括ケア推進室長

方　法

1）NPO法人医薬品適正使用推進機構（NPO J-DO)より鍋島俊隆理事長(元名古屋大学医学部教授)を中心に、榊原幹夫薬学博士、藤田保健衛生大学毛利彰宏准教授、富山大学宮本嘉明准教授を招き、身近な薬に関する特性を実験を通じて理解を進めた。

2)参加者は、医療と介護の職種から37名、薬剤師35名＋運営補助4名
1テーブルごとに参加者3～5名に対し、地域薬剤師会より２～３名の薬剤師を配し、参加者は薬剤師のサポートを受けながら実験を進めた。

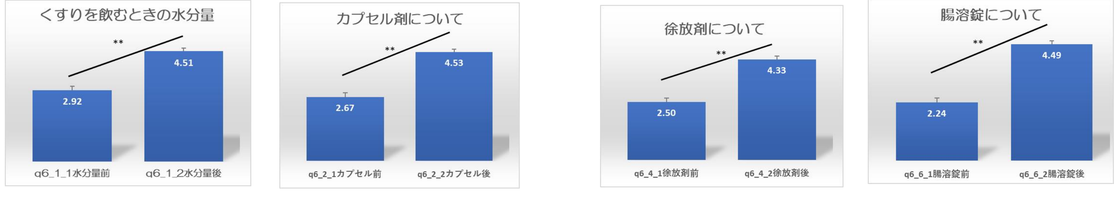
3)参加者へは質問紙を使った受講後アンケートを実施した。
アンケート内容は、NPO J-DO榊原幹夫薬学博士使用の質問紙に準じたものを使用。以下の項目を5段階で評価を受け、受講前後を比較した。
- 実験を通した薬に対する理解度
- 薬剤師活動に関する理解　・薬剤師への親しみやすさの変化
- 薬剤師との連携

4)統計解析：比較は、Wilcoxonの符号付順位和検定にて行った。
解析は、IBM SPSS Statistics for Windows,Version 24.0使用

Q.くすりに関する理解の変化

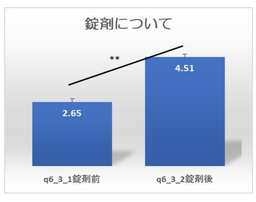
服用時に十分な水分が必要なことを、カプセルを使って体験

剤形意義を胃液と腸液を使って体験

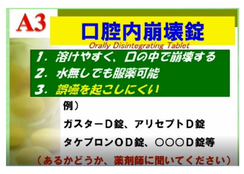


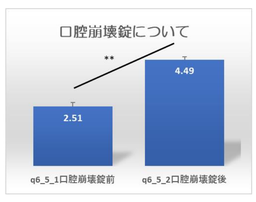
すべての項目で、薬剤に対する理解度向上　UP↗

錠剤コーティングの意義を体験

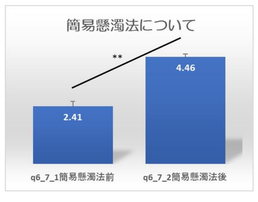


口腔崩壊錠を体験

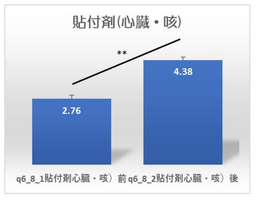




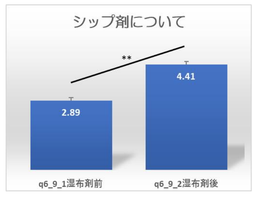
服用困難者に対する簡易懸濁法を体験



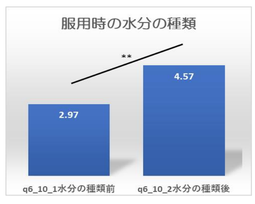
心臓や喘息の貼付剤の皮膚への粘着を体験



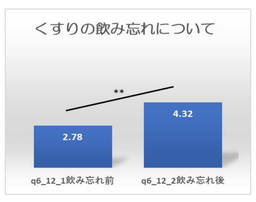
シップ剤の便利な使い方を体験



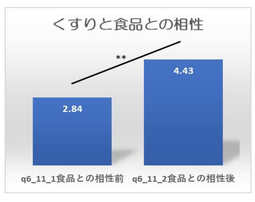
薬剤服用時の水分の種類を体験



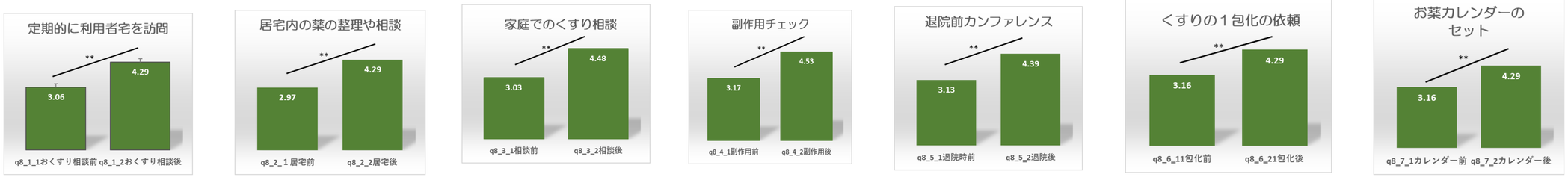
飲み忘れ時の服用タイミングを確認



薬剤と食品の相性を体験

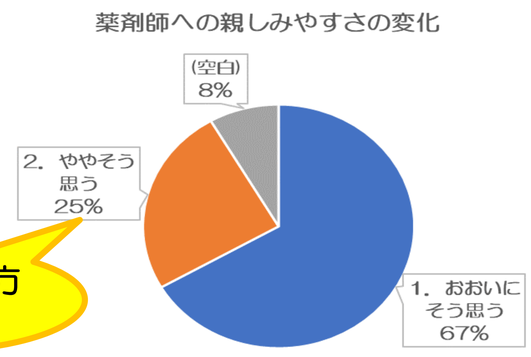


Q.日常の利用者さんの薬について、薬剤師にどの程度相談したいと思いますか？薬剤業務に対する意識の変化



職能への期待 UP↗

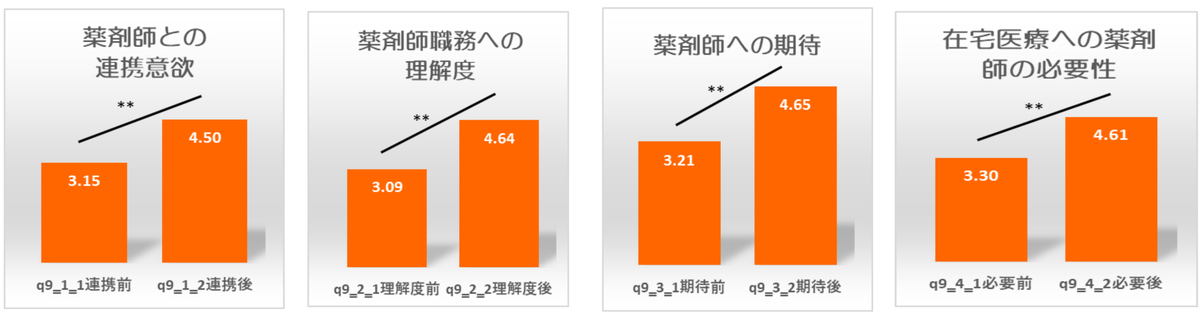
Q.今回のセミナーで、薬剤師に対する親しみやすさは変化しましたか？



変化した方 92%！

Q.今後の薬剤師との連携について、評価してください。

向上↗



実験を通じた「お薬教室」は職種間の連携構築に有用

＜人としてのつながり＞
- 今回の行事では、地域ごとに医療・介護の事業者と薬剤師を同一テーブルに配すよう配慮した。
- 他の医療・介護の業種にとって、薬局内で働く薬剤師とのかかわりは少なく、多くは気軽に相談できる対象であると言えない。職場を離れて、同一テーブルで、顔と顔をあわせて知り合うことで、互いの理解を深め、患者利益につながること考えられる。

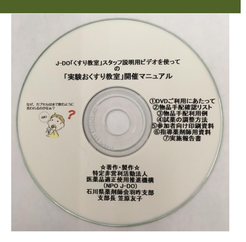
＜薬剤に対する理解＞
- 介護の現場では多くの薬剤が廃棄されている。互いの理解は、被介護者のみならず、医療経済にも貢献しうるものと考えられる。
- 実験という形で薬に触れると、薬剤に対する理解が格段に向上する。

みなさんも、やってみませんか？

今回のお薬教室の内容は、NPO J-DOによって
- お薬教室の進め方についての薬剤師指導用DVD
- 配布資料および準備資材のCD

にまとめられた。

これらDVD＆CDは、希望すれば下記にて実費で頒布を受けることができる。



【連絡先】J-DO日本医薬品適正使用機構 鍋島俊隆先生
〒470-1192 愛知県豊明市沓掛町田楽ケ窪1-98
藤田保健衛生大学大学院医療科学専攻先進診断システム探索講座内
☎0562-93-2611／2519　📠2519